

快適な北国の暮らしを実現するため、高速道路ネットワークの整備や安全・安心の道づくり、シーニックバイウェイ、道路環境の整備などさまざまな道づくりの取り組みがなされています。

一番身近なところにあり、社会生活に不可欠な社会資本である道路をもう一度、地域という立場から見直し、新しい関係を築いていく、そういった時代が来ています。今回は、それぞれの地域で特徴ある地域づくりを実践している方々に、「地域づくり」と「みちづくり」の新しい関係についてお話していただき、未来のみちづくり・地域づくりにつないでいきます。

地域ネットワークとみちづくり



谷 博之 氏

北海道の地域とみちをつなぐネットワーク連携会議事務局長
北の星座共和国建国推進事務局企画調整リーダー

インタビュアー

林 美香子 氏

フリーキャスター

林 毎日の生活に欠かせない道路、そして社会生活にも不可欠な道路、いつもお世話になっている道路ですが、今回は地域づくりという立場からお話をうかがってまいります。

谷博之さんは、本業は建設業を営む谷組の専務さんですが、「北海道の地域とみちをつなぐネットワーク連携会議」事務局長、「北★北海道に高速道路を実現する住民の会」事務局長、「北の星座共和国建国推進事務局」企画調整リーダーなど、いろいろな地域活動をされています。何からうかがえばいいか迷いますが、まず地域とみちということで話を進めさせていただきます。

谷さんが「地域づくり」にかかわるきっかけはなんだったのでしょうか。

道北の市町村を星座にみたくて広域連携

谷 20年ほど前、私が名寄の青年会議所に所属していて、そこでの自己修練で「まちづくり」を考

える機会があったこと、兄の一之が町の商工会青年部にいて、よく二人で話していたことからです。

私の会社のある下川町は、人口4千人ほどの町です。多いときは1万5千人ほどおりましたが、三菱銅山が休山で縮小し、しかも名寄本線の廃止や営林署の統廃合などもあって急激な人口減少が起き、町がかなり沈んでいました。

当時、私たちの町を含む道北圏の市町村では、いろいろなまちづくりをしている商工会や青年会議所の人たちが自分たちの活動だけで満足せずに、旭川や札幌、東京との格差を解消するために、何か連携してやろうということになりました。みんなまだ30代前半で発想力もありました。そのときの連携づくりのキーワードとなったのが、「星座」です。各町村に星座名をつけて、まちづくりをしようというのです。オホーツクの枝幸町はカニがたくさんとれるから「かに座」、士別市は羊



でのまちおこしで「おひつじ座」というように、みんなでこじつけました。星座をキーワードにした道北圏全体の連携したまちづくり、14の市町村を結んだ「天」の字でイメージを統一、単独で

は10等星でも、集まれば2等星や3等星ぐらいには光ると期待しています。

林 今でこそ、広域連携とか、パートナーシップとか、よくいわれていますが、20年前に民間の立場で若い皆さんがそういう発想をするのはすごく画期的なことですね。

谷 当時は、全国的にミニ独立共和国を作る地域おこしが流行っていて、われわれも星にちなんだ「北の星座共和国」という独立国をつくらうとしたわけですが、できてしまうと終点になる恐れがありますので、継続するためにあえて北の星座共和国建国推進事務局としています。

林 すごいですね。地域づくりを立ち上げてても活動が継続しないで苦勞しているところも多いのですが……。

谷 基本的には自分たちが自分たちのまちを好きなことです。若いとどうしても都会に目を奪われますが、見つめ直して、自分たちの町が本当にいい町だと認識すると、自分たちも共和国をつくれるという自信になる気がします。だから何年たっても終わらせず、限りなく可能性を秘めた町づくりができると信じて続けています。

暮らしとまちづくり、みちづくり

林 北の星座共和国の活動も、北の天文字焼きなどのイベント的なものから、スローフードや高速道路の誘致活動にまで拡大されていますね。皆さんが暮らしと道に注目したきっかけは何ですか。

谷 名寄市で、京都で行われている大文字五山送り火と同じことを冬をイメージした「北の天文字焼き」として立ち上げ、今年で18回を終えました。イベントを開催すると、自分の満足だけでなく、広く一般の人にも見てもらいたい、観光として町に来てもらいたくなりました。

そうすると、地域の交通の不便が目立ちます。例えば、札幌圏の人が下川に来る場合、高速道路があれば日帰りできるのに、一泊、二泊しなけれ

ばならない。観光だけではなく、物流の面でも道北圏のものを道央圏や道外へ運ぶには、道をつなげないと何にもできないというところで、道をテーマにした取り組みの始まりになったのです。

オール北海道で高速交通ネットを

谷 当時、高速道路は行政任せで、みんな北海道縦貫自動車道は絶対に稚内までいくという意識でしたが、なかなか先へ進む気配がなく、公共事業の見直しや道路公団民営化など道路建設をめぐる厳しい状況の中で、ひょっとすると稚内までいかないのではないかとこの恐れが出てきました。

そうすると、本州の人が観光等で旭川空港に降りても、そこから稚内まで4～5時間もかかるということでは困ります。やはり高速道路が必要だということで、「北★北海道に高速道路を実現する住民の会」を平成14年10月に立ち上げました。

林 北★北海道高速交通情報紙「きたのみち通信」の発行にも谷さんたちが関わっているのですね。

谷 これも「北の星座共和国」でやっています。広大な北海道の地域づくりには高速交通ネットワークの整備が不可欠です。上川北部を中心に住民に訴えて、将来は稚内までつなげて北・北海道全体の観光にするため、上川北部だけでなく、稚内の民間の人とも協力しながら、北・北海道の道づくりを目指してスタートしました。

「きたのみち通信」は、地域の人たちへのPRのため、年2回発行しています。

林 4月に発行された第6号では、「北海道の地域とみちをつなぐネットワーク連携会議（みちネット）」会長の宮田昌利さんが、北側国土交通大臣に直接要請した記事が掲載されていますが、かなり中央にもアピールなさっていますね。

谷 実は、これまではそれぞれの圏域ごとに活動していましたが、中央では北海道は確かに面積は広いが一つだ、他の都府県は必ず1団体で来るといわれます。それで、オール北海道の組織として、今年1月、6地域5団体*による「みちネットの会」を発足させ、北側国土交通大臣に陳情に行きました。おかげさまで大臣からもぜひ頑張ってくださいと話をしていただきました。ほっとしています。

*5団体：道南高速交通ネットワーク推進連絡協議会、オホーツクの道を考える会、十勝の絆を考える会、釧路圏みちとくらしネットワークフォーラム、北★北海道に高速道路を実現する住民の会。

林 谷さんは北・北海道で活動されていますが、道路を考えるとやはりそこだけの問題ではなく、北海道全体のネットワークとしての整備が本当に大切だということですね。

谷 どこに行くにも今は車です。道民の移動手段のおよそ70%は車です。下川から函館に行く場合にも少しでも速く、いい道を安全にと考えると、自分たちの町だけでなく、北海道全体の高速交通ネットワークをつくらなければというのが地域の人たちの思いです。

林 こうしたことへの地域の皆さんへのアピールとその反応はどんな感じですか。

谷 北海道全体と北・北海道での活動状況をこういう形で年2回程度情報発信しているのと、年に1、2回、市民を対象にフォーラムや意見交換会を開催し、また高速交通ネットワークの必要性について、アンケートをとらせていただいたりしています。それによるとほとんどの人が高速交通ネットワークの必要性を訴えています。

特に道北圏では旭川市を除くと、総合の救急病院が名寄市にあるだけです。心臓発作や脳溢血では寸間を争うので、高速交通ネットワークの整備が不可欠です。フォーラムでは、もう30分早かったら助かっていたというケースがかなりあるという救急隊員から話をいただきました。やはり医療は国民みんな同じ権利があるのですから、地方にあっても同じ条件にしていってほしいという声が強いです。それと、身障者やお年寄りが使えるバリアフリーなみちづくりの要望もよく聞きます。

地域づくり活動とみち

林 皆さんが北の星座共和国で地域づくりを始めて20年、かなり進んでいる面もあると思うのですが、道路の使い勝手はいかがですか。

谷 かなり進んではきていますが、札幌圏は別に



して、きわめてゆっくりというのが実情だと思います。

北海道では札幌が首都圏で、そこを中心に経済が発展するのは当然としても、同じ道民税を払っているのですから、道づく

りは同じ条件にしてもらいたいし、一緒に高速交通ネットワークをやっていただきたい。

林 地域づくり活動を実践されている谷さんですから、余計そう思われるのかもしれませんが、お



持ちいただいたマンガ版の高速道路やスローフードなどのミニ冊子は、読みやすく楽しいですね。

谷 1週間に3回ほど下川町から旭川市に車で1時間半から2時間かけて行きます。高速道路ができると30分短縮されます。マンガ版は子供たちに高速道路はどうして必要なのか、どうして北海道だけ途切れているのかを理解してもらいたくて作っています。

林 反響はどうですか、無料ですよ。これだけの協賛スポンサー集めもボランティアですか。

谷 はい。「北★北海道グルメの散歩道パスポート」は、ガソリンスタンドや道の駅、自治体などに置いていますが、観光客の方々には非常に好評です。自分たちがどこに行ったらいいのか、簡単に見せる資料があれば助かるという体験を生かして作っています。

林 ずいぶん幅広く活動されていますが、地域づくりにかける時間はかなりなものですね。

谷 おそらく本業の谷組の従業員にいわせると半分というでしょう。でも本業をおろそかにせず、空いている時間にするので割と短時間で発想はできます。

ただ地方で人に会う場合、稚内だと3時間半かけて行って1時間話して帰るという状況です。特に、上川でのスローフード運動ですが、南北に非常に長く、中川町から南富良野町まで行くと半日以上かかり、なぜ高速交通ネットがないのかと思います。稚内、留萌、網走は北北海道の地域づくりの拠点ですが、その間の移動だけでほとんど1日終わってしまいます。

また、特に道北圏は雪が多く、海岸へ行くと風が強くと吹いています。音威子府村から中川町へ天塩川が蛇行して流れていますが、その川に沿って道ができていてよく通行止めになります。そうすると安全で安心して走れる道づくりが欠かせません。高速交通ネットワークの整備で、物流や観光、

医療、地域づくりにさまざまな効果が出てくると
思います。

異業種の連携で地域再生

林 下川町では、スローフードなどの農業や林業
と関連するさまざまな地域づくりをいろいろな業
種の方と連携して実践されていますね。

谷 まちづくりは町を活性化して働く場をなくさ
ないためです。人口が3万人を割るところは合併
をしなければだめだというような話が出ている中
で、下川町に住みつけていくためには、新たな
下川町をつくらなければだめではないか。そうす
ることで、自分たちの企業も発展し、家族も安心
して生活できるのではないか。それで、まず町を
つくろうというのが最初です。林業や農業関係者
の方々にもそう思う人がたくさんいます。

一緒にやる人が少しずつ増え、人と人とのつな
がりができ、広域の町村でも同じ考えの人たちが
出てきて、それが北・北海道全体に広がり、最後
には北海道全体にまで及ぶのがまちづくりの始ま
りではないかと思います。



林 素晴らしいですね。
自分のためではなく、ま
ず地域のためで、それが
回りまわって自分にもプ
ラスになるという発想を
する方は、まだまだ少数
派ですが、それは本当に
必要なことだと思います。

谷 農業に参画したのもその思いからです。建設
業で農業の基盤整備を何十年も前から行っていま
したので農業との関わりはゼロではないのです
が、生産することはありませんでした。スローフ
ード運動を始めたころから農業者と接触する機会が
非常に多く、生産者の大変さも理解でき、生産性
のある農業を楽しくすることを考えました。

下川町ではトマトジュースを作っていて、トマ
トの需要が多く、原料が足りないという話が出て
いたものですから、トマトに着目しました。私の
本業である建設業も公共事業の縮小で経営の安定
化策としてリストラの必要性が出てきました。リ
ストラすると町内に雇用する場がなければ人口流
出になり、まちが寂れる。大きくもうけなくても、
雇用確保ができるのならと、この2~3年農家と
も相談しながらフルーツトマト栽培を勉強してき

ました。昨年は非常に評価が良かったものでは
から、今年は本格的に多めに作ってやってみよう
ということになっています。おかげで通年雇用が2
人、パートさんも5、6人増やして雇えるよう
になりましたので、農業によって地域振興ができ
るということを改めて理解できました。

林 農水産物は鮮度を保つためには、速く配送し
た方がいいわけですね。農業に参加してみても
感じる道路はどうですか。

谷 中川町の酪農家に聞いた話では、牛を車に乗
せ、苫小牧から船に乗せて1、2日（時間がかか
ればかかるほど）かけて行くとストレスで牛の体
重が何十キロも減ってしまうそうです。昨年から
作り始めたわれわれの農作物も鮮度を保つため
には少しでも早く着けるような形をとっていか
ないと本州方面に負けてしまうということはある
ですね。生産して初めて分かることです。

地域づくりで社会貢献

林 地域づくり活動では、フォーラムなど考える
のは好きでもあまり実践しない人が多い中で、実
行して形にしていらっしゃるのは素晴らしいこと
ですね。

谷 やっぱり好きだからと思います。まちづくり
を20年やっていますが、いろんな人と出会い、い
ろんな楽しさを教えてもらっています。これで私
は一生やっていけると思います。ただ、若い人に
何とかこの思いをつなげたい。従業員の人たちは
当初、社長と専務はまちづくりだといって会社
にいないのはおかしいと思ったようですが、20
年経って町が変わったのは、私たちがこうして
いたからだということがやっとわかったよう
です。今は従業員が率先してボランティア活動
をいろいろやっています。

林 農業への新規参入は地域づくりとのかかわ
りでもあるのですね。

北の星座共和国では何人くらいでこれだけの活
動を支えていただけるのですか。

谷 北の星座共和国設立当初の人が主で実質
的に5、6人ですが、全道から応援していただ
いている人たち（遊星人クラブ会員）もた
くさんいます。ただ、年齢も上がって新
しい人がいませんので少し寂しいです。

林 市民活動では会長になって号令する人は
いても事務局の担い手がいなくて継続でき
ないとよく

聞きますが、谷さんは事務的なことも自分でなさるのですか。

谷 共和国には代表職を置かないで兄が事務局長をしているだけです。活動は各々が好きな得意分野を受け持ち自主的に活動するので、あまり負担を感じません。それが長続きする理由かもしれません。事務的なことも自分で時間を見つけてすべて行っています。日程などすべて自分で決めますから、面白いと思います。自分でやる方が人にやらせるより頭に記憶されて、動いたり説明するのが楽になります。

建設業では経営資格審査に社会貢献の項目があって、例えばお年寄りのところで雪はねをするそれを記載することになりますが、そういう単発的の社会貢献だけではなく、通年して何十年も地域に対してどういうことをやっているのかということが本来の地域づくりの社会貢献だという思いでやっています。

林 今は北海道が全体的にそうですが、地方は何で食べて生きていくのかという問題に直面しています。おっしゃられるように、広い意味での社会貢献とは、社会的に生活していく基をどうやってつくるかということにあるような気がします。

今後の地域づくり道づくり

林 さて、谷さんたちの地域づくりや道づくりでは、今後の活動としてどのあたりに重点を置いていくのでしょうか。

谷 基本的には下川町です。今後は合併することを考えて、下川町にしかないものをつくりたい。よそから来た人から下川町ってこういうところがいいよねという話はたくさん聞こえてきます。メインは癒しですが、農業をやりたくて来る人もいらっしゃる。東京や関西方面の人はこういうところだから住みたいと、われわれには感じないよさを発見してくれる。これをPRするだけで観光客、移住者が増加すると思います。

道づくりという面では、ヨーロッパには見習うべきことがたくさんあるような気がします。何百年も前からこういう想定をして道をつくっているというのがあるのですね。どこの町がというのはなくて、ヨーロッパ全体の道自体が道路幅をものすごく広く取っていて、その管理を住民がやっている。当然、道路管理者もやっていますが、自分たちの家の前の道は自分たちで管理するという

意識が非常に強い。特にフィンランドは商店街を歩いていても雪や氷で滑ったり転んだりするのはそういう状態にしている自分たちが悪いという意識を持っています。これなども今後の北海道では必要なことだと思います。



また、北海道の観光立国を実行するためには、下川町や北・北海道だけでなく、最終的には全道ベースで道外の人に目を向けさせるべきです。そのためには、これまでに地域づくりや道づくりで培った経験や人脈のつながりが絶対に必要になると思います。

林 ありがとうございます。本当に素晴らしい活動をなさっているのだと改めて感じます。また、まちづくり地域づくりの熱意を感じました。それを淡々と当たり前のように実践されていることが、さらに素晴らしさを増しています。一日も早く稚内までの高速交通ネットワークが整備され、まちづくりへの思いが次世代へと引き継がれていくことを期待しています。

(本インタビューは、平成18年4月5日に札幌で行いました)

profile

谷 博之 たにひろゆき

1956年下川町生。'82年(株)谷組入社。'90年(有)アフター設立。'94年(有)クレオ設立。'00年(有)サイズ設立。'03年(有)アイジー損保取締役。北の星座共和国建国推進事務局設立広報調整委員、(社)日本青年会議所北海道地区道北ブロック協議会副会長、(社)名寄青年会議所理事長、NPO法人なよろ観光協会会員、NPO法人しもかわ観光協会理事、北・北海道に高速道路を実現する住民の会事務局長、かみかわにスローフード運動を普及する会事務局長、名寄日韓友好親善協会事務局長、下川町建設業協会会長、下川町中小企業振興協議会委員、下川町雇用創造促進協議会会員、北海道の地域とみちをつなぐネットワーク連携会議事務局長など公職多数。

林 美香子 はやしみかこ

1976年北海道大学農学部卒業。'76年札幌テレビ放送(株)入社。'85年同社退社後フリーキャスターとして活動。食・農業・地域づくりなどのシンポジウム・講演会にも参加。現在の担当番組エフエム北海道「ミカコマガジン」(日曜朝8:00~8:30)。「北海道文化財団」評議員、「北海道田園委員会」委員、「スローフード&フェアトレード研究会」代表、農林水産省「食と農の応援団」メンバー、「フォーラム・エネルギーを考える」メンバーなど公職多数。著書「ワーキングマザーの元気ブック」(北海道新聞社)、「楽々おかずとおやつ」(北海道新聞社)、「ハーブティを飲みながら」(共同文化社)。
